三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

第28号
2024年3月

山本有三　住まいの履歴

―活動を支えた家―

会期 令和6年3月16日（土）～9月1日（日）

◆初めての自分の家

―東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺野田南一八二〇

山本有三は、大正15（1926）年3月、東京府北多摩郡武蔵野村（現武蔵野市吉祥寺本町）の二四〇坪の土地に、初めての持ち家を建てました。

当時の有三は、「生命の冠」（大正9年）などの成功によって劇作家としての活動が軌道に乗り、文筆で生計を立てられるようになっていました。折しも、家の新築を決めた同時期に朝日新聞社学芸部長である土岐善麿から長編小説の連載を懇請され、新居を拠点に作家としての新たな挑戦に踏み出すことになります。

連載を抱えていたころの有三はひどく張り詰め、邸宅にも年々、執筆に集中するための増改築がほどこされていきました。「波」連載中の昭和3（1928）年には、隣家が騒がしくなったことから二階に新たな書斎を増築。「女の一生」の執筆に追われていた昭和7年頃には、書斎への階段にシャッターを取り付け、一階の声が筒抜けにならないよう工夫を凝らしています。

有三は、武蔵野村の邸宅で「東京・大阪朝日新聞」に四作の長編小説を連載し、作家としての名を確固たるものにしていきました。

◆広大な洋風建築

―東京府北多摩郡三鷹村下連雀九一

高名となる一方で、多忙を極めた有三は、昭和10年頃には不眠症などによって体調を著しく悪化させ、武蔵野村からの転居を検討し始めます。健康によく、執筆に集中できる静かな環境の邸宅を探していたところ、麦畑に囲まれた閑静な地にそびえる三鷹村の洋風建築にめぐり合い、昭和11年に移り住みました。

三鷹の邸宅は、一一六九坪の土地に建つ地上二階地下一階の、一家族が暮らすためには十分すぎるほどの広さで、有三は二階の二部屋を和・洋書斎として活用しています。自然豊かな環境のなかで健康を回復させながら代表作「新編　路傍の石」をはじめとする作品を発表していきました。

しかし、国内情勢の緊迫化とともに検閲は厳しさを増し、作家としての活動は思うに任せぬものとなっていきます。こうした時勢にあって、有三は、作家業にとどまらない多角的な活動を旺盛に展開させていきます。昭和17年には、一階の応接間を利用して、近隣の子どもたちに蔵書を開放する「ミタカ少国民文庫」を開設。昭和21年には、自らの手で有識者を呼び集め、邸内に私設の国語研究所を開設するなど、三鷹の邸宅を暮らしの場としてだけではなく、公的な活動の基盤としています。

◆こだわり抜いた理想郷

―神奈川県足柄下郡湯河原町宮上三三九ノ一

戦後の有三は、昭和22年に第一回参議院議員選挙にて当選を果たし、議員時代を大森区新井宿（現大田区山王）で過ごしましたが、昭和28年、6年間の任期を満了すると、神奈川県足柄下郡湯河原町へ移住しました。古い平屋を購入し、ここでも自らが見込んだ大工と綿密な打ち合わせを重ねながら、書斎を含む離れの増築や門の改修など、隅から隅までこだわり抜いた理想の邸宅を造り上げました。

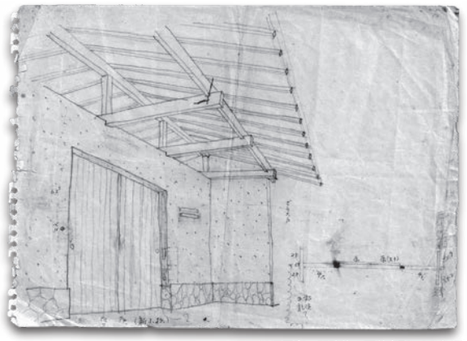
有三は、この湯河原の邸宅を〝理想郷〟と称し、昭和49年に亡くなるまでの約20年間を過ごしました。古代史の研究に没頭する日々を送りましたが、86歳という老齢にして、「濁流　雑談　近衛文麿」の連載を開始します。心身の力の限界から、未完のまま絶筆となったものの、有三の創作への情熱を最後まで支えたのが、理想郷であり終の棲家となった湯河原の邸宅でした。

武蔵野・三鷹・湯河原をはじめとする個性豊かな家に支えられながら、有三は実に多彩な活動に奔走し、多くの事業を成し遂げたのでした。

（文芸企画員・学芸員　三浦穂高）

コラム　湯河原邸　門へのこだわり

山本有三は、参議院議員としての6年の任期を務め終えると、表舞台から退くかのように湯河原へ移り住みました。古い平屋を購入して母屋とし、東の傾斜地に仕事場として二階建ての離れを増築。母屋と離れとを長い廊下でつなぎ、北側はすべて書棚に、南側は高窓にしつらえました。さらに母屋の玄関と応接間を改造したほか、門を新築するなど、こだわりを尽くした邸宅を建てています。特に家の顔とも言える門への入れ込みようは、家族が「門のこと以外には何も考えられないのではないかと思うほど」*で、大工の瀬戸良治氏と熱心に打合せを重ね、門灯の位置やのぞき窓の大きさなどの細かい仕様にも手を抜かず、心を砕きました。記念館が所蔵する有三自筆のスケッチには、精緻な門の鉛筆画に、各部材の寸法等が細かく書き込まれており、有三の熱中ぶりがありありと伝わってきます。



湯河原邸　門改修の下絵（昭和29年頃）

＊永野朋子『いいものを少し　父　山本有三の事ども』（独歩書林　平成10年3月）

事業報告

《第19回　秋の朗読会》令和5年11月3日開催

有三とゆかりの深い祝日である「文化の日」の夕べ、第19回目となる秋の朗読会を開催しました。今回は、文学座の大滝寛さんをお招きし、有三の代表的な戯曲作品「米百俵」を朗読していただきました。現在の苦境を耐え忍び、未来の人材育成に力を注いだ長岡藩の大参事・小林虎三郎を熱演した大滝さん。藩士たちを説く切々とした声音に聴き入る参加者の姿が印象的でした。

《アフタヌーン・ミニコンサート》令和5年7月23日、8月13日、12月10日開催

年に3回にわたり開催しているアフタヌーン・ミニコンサートでは、回ごとにフルートやヴァイオリン、オーボエといった様々な楽器の演奏を聴くことができます。7月、12月は、みたかジュニア・オーケストラのみなさん、8月は、クラリネット奏者の人見剛さんとフルート奏者の村野直子さんにご出演いただきました。趣深い洋館のなかで、多彩な管弦楽の音色に耳をかたむける、素敵なひとときとなりました。

（7月23日）

（8月13日）

（12月10日）

《ガイドボランティア》
土・日・祝日の午後1時から4時まで解説を行っています。事前申込は不要ですので、お気軽に声をおかけください。

編集・発行
三鷹市山本有三記念館
〒181-0013　東京都三鷹市下連雀 2-12-27
TEL：0422-42-6233
URL：http://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/
過去の企画展館報をホームページで公開しています。（旧 Twitter）@BungeiMitaka

開館時間：午前9時30分～午後5時
休 館 日：月曜日及び年末年始（12/29～1/4）
　　月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館
入 館 料：300円（20名以上の団体200円）　年間パスポート1,000円
　　・中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、「東京・ミュージアムぐるっとパス2024」利用者は無料
アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分
　　JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口（公園口）より徒歩20分
　　三鷹駅南口よりみたかシティバス「むらさき橋」下車徒歩2分
　　吉祥寺駅南口より小田急バス「万助橋」下車徒歩5分

山本有三の「生家」と栃木での暮し

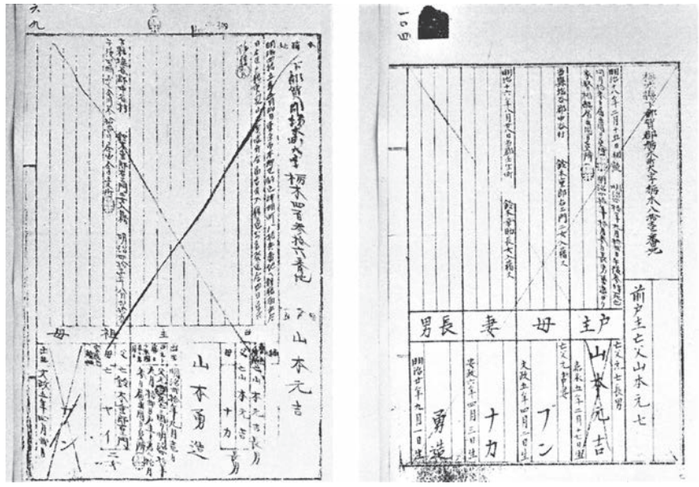
石川　達也（栃木市立文学館　学芸員）

1．有三の「生家」について

有三の「生家」については永野賢氏の『山本有三正伝　上巻』をはじめとする研究によるところが大きい。諸説あるものの、ここでは現在通説となっている永野説によっておきたい。

有三の出生地は「栃木県下都賀郡栃木町栃木七十一番地」であり、大通りに面した間口二間半の二階家の貸家であった。ここで有三の父である元吉は呉服屋を営んでいた。その商売は、高級品を主としていたとされ、必ずしも順調ではなかった。そのため、有三が生まれた翌年（明治二十一年（一八八八））頃には店をたたみ、路地裏の仕舞屋[1]へ転居した。その転居先が現在確認できる最古の除籍謄本（右画像）に記載されている「栃木八十一番地」（後に四百三十六番地）となる。（実際にはこの土地をさらに分筆し、大通りには面していなかったと思われる。現在は栃木グランドホテルの駐車場[2]）この地で元吉はそれまでの店商いから富商や素封家のお得意を対象とした担ぎ商いへと手法を変え、営業していた。有三の「いいものを少し」という考えは父親譲りのものであったのかもしれない。

有三は生後一年程度で転居しているため「生家」の記憶はなかったと思われ、転居後の家が栃木での自分の家として記憶されていただろうし、後に本人が書き残した栃木の暮しは、それにもとづいたものであろう。いずれにせよ、有三が栃木時代に暮らした家の詳しい様子を知ることは難しい。また、残された資料も限られており、詳細な所在地については諸説ある現状[3]となっている。



2つの除籍謄本（『山本有三正伝　上巻』口絵より転載）

2．有三の栃木時代

有三が生まれたのは明治二十年（一八八七）七月二十七日（戸籍上は九月一日）であり、同二十五年（一八九二）四月には栃木幼稚園（現存していない）に入園している。この幼稚園は栃木町に初めてできた私立幼稚園で、栃木第二小学校（現在の栃木中央小学校）の西南側校庭の一部を使用して開設されたもので、有三の家からは四、五百メートルの距離にあった。

明治二十七年（一八九四）四月に栃木尋常小学校[4]へ入学、同三十一年（一八九八）三月に卒業、同年四月に高等小学校へ入学し、同三十五年（一九〇二）三月に卒業した。在学中は首席で通したとされている。また、この時期には小学校の近くにあった漢学塾（中島靖による「明誼学舎」）にも通っている。

明治三十五年四月末、有三は東京の呉服店に奉公に出ることとなった。有三自身は中学進学を望んでいたが、跡継ぎとして商売の修行が必要と考えていた元吉の指示によるものであった。有三が進学を希望した栃木中学（現在の県立栃木高等学校）は、明治二十九年（一八九六）に創立されたもので、当時有三は小学校三年生であった。『路傍の石』にも次野先生が吾一たちに中学が出来る話や進学を薦める話が登場する。『路傍の石』が「自伝的」小説といわれる一つの場面であるが、吾一は経済的事由により進学がかなわなかったが、有三の場合は理由が異なっている。

元吉は教育に対して理解がなかったような説があるが、幼稚園や漢学塾へ通わせていたことを考えると、むしろ教育熱心な父親であったと思われる。この誤解は、元吉の目的が自分の後を継いで欲しいというものであり、有三の思いとは違っていたことによるものであることは想像に難くない。しかし、有三の教育を重視する考えは、自分が学んできたことや父親から与えられた教育の機会による影響があったのではないだろうか。

進学の夢を絶たれ、奉公へ出た有三であったが、明治三十六年（一九〇三）三月には栃木へ戻ってきてしまった。本人や当時の同僚などの回顧によれば、あまり良い奉公人、修行態度ではなかったらしい。その後、母親の応援により父親の承諾を得て、明治三十八年（一九〇五）一月に再度上京し、勉学に励むこととなったため、有三の栃木時代は再度途切れた。しかし、明治四十年（一九〇七）九月に有三の第六高等学校合格を喜んでいた元吉が急逝し、入学を断念した有三は帰郷し、家業を継いだため、栃木での暮しが再開された。

家業を継いだものの、学問への思いは止まず、明治四十二年（一九〇九）七月に第一高等学校合格を機に再々度上京した。この後、戦時中の疎開期（昭和十九年（一九四四）四月～同二十年（一九四五）九月）を除き、有三が再び栃木の街で暮らすことはなかった。

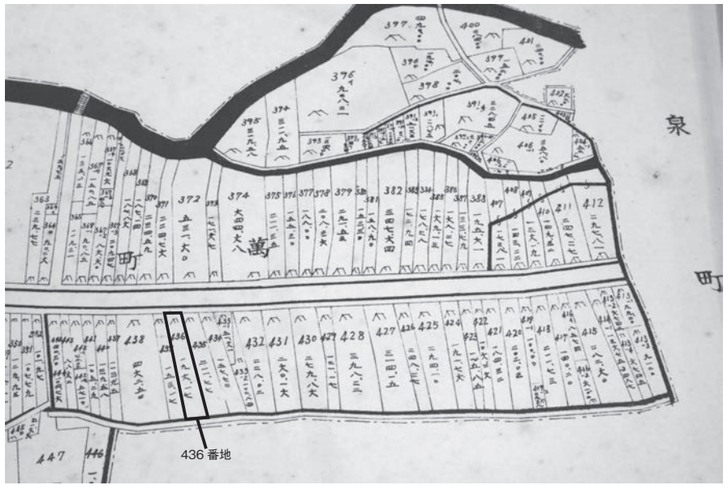
3．栃木での暮し

有三は一人息子（姉がいたが夭折）であったが、栃木の家には両親の他にいとこたちが入れかわり同居していた。有三の作品に出てくる兄弟像は、このいとこたちとの関係に基づくものかもしれない。ただ、作品の兄弟は対立し、争う場合が多いが、有三がいとこたちと対立していたわけではない。初恋の相手も母方のいとこであったとされ、その実らなかった淡い恋心は、後に『女の一生』の冒頭に活かされている。

一方、友人たちと錦着山での崖滑りや巴波川での水泳、池での魚釣りなど活発に遊んでおり、餓鬼大将気質であったという証言がある。さすがに吾一少年のように鉄橋にぶら下がった経験はないと思われるが、何事にも一生懸命になる性格は、この時期からすでにうかがえる。

また、明治三十二年（一八九九）に栃木町に演劇（後には映画）の劇場として明治座が開設し、芝居好きであった母親のナカに連れられて歌舞伎や壮士劇などに多く触れた。この経験は、有三が戯曲作家として世に出たことと無関係ではないであろう。

有三は上京後かなりの期間ふるさとである栃木にあまり良い印象を持っていなかったようであるが、本人の人格や作品の背景、登場人物の描写などに栃木での暮しが影響していたことは間違いない。有三作品には、栃木時代をはじめとした家族、暮し、経験が散りばめられている。作品の現実感やその描写力は、実体験に裏打ちされた上に、きっちりと下調べをして書くという強いこだわりの結果完成したものである。



「栃木県下都賀郡栃木町地番反別入図」（昭和5年〔1930〕、栃木市立文学館蔵）

1　友田博通氏は、栃木の街の店舗兼住宅の建築様式や『路傍の石』に登場する家の表現などを参考に、この家の間取りを推定し平面図を作成している。（『三鷹の家と山本有三の原風景』『三鷹市山本有三記念館館報』第十七号、平成三十年（二〇一八）、三鷹市山本有三記念館）

2　この駐車場には、有三の家にあったとされる稲荷社の祠が残されている。一時期は屋上にあったが、現在は駐車場の一画にある。昭和六十一年（一九八六）二月には、永野賢・朋子夫妻も現地（当時は屋上）で確認している。（『うずまっこ』№一一四、ふろんてぃあ）

3　「生家」については母親の実家があった壬生誕生説、父親の出身地である宇都宮誕生説などもあるが、永野氏により否定されており、栃木町説が定説である。ただし、その所在地については地番変更や住所表記変更等もあり、永野説が主流ながら地元では異説もあるため、今後の資料発見や研究の深化を待ちたい。

4　後の栃木第一小学校。第二小学校と合併し、栃木中央小学校となる。跡地は栃木市市民交流センターとなっており、敷地内には旧栃木市民会館から移設した文学碑（有三自筆の「自然は急がない」を拡大したもの）がある。

主要参考文献

栃木市『栃木市史　資料編　近現代Ⅱ』昭和五十八年（一九八三）、栃木市
永野賢『山本有三』（新潮日本文学アルバム33）昭和六十一年（一九八六）、新潮社
同『山本有三正伝　上巻』昭和六十二年（一九八七）、未来社
永野朋子『いいものを少し　父 山本有三の事ども』平成十年（一九九八）

石川達也（いしかわ・たつや）
昭和55年（1980）、愛知県生まれ。
専門は日本近世史。
主な論文に「御師制度廃止後の伊勢神宮崇敬団体に関する一考察」（『埼玉大学紀要（教養学部）』52(2)2017年3月）など。栃木市立文学館で担当した展示に「開館記念特別展有三・信子・トヨの育った時代」（2022.4）、「没後50年吉屋信子と栃木」（2023.4）、「花物語を描いた人　中原淳一」（2023.9）など。